



文献紹介

John D. Arras, 'Nice Story, But So What?'

概要

近年、倫理学（特に医療倫理学）において、物語の役割が注目されている。著者は物語に注目する立場を大きく①物語が倫理を補完するという立場、②物語が倫理の基盤であるという立場、③物語が倫理を代替するという立場の三つに分けている。著者は①の立場の重要性を認めたとうえで、②と③の立場には問題点があると指摘している。

プロジェクトとの関係

高齢者の意思決定は、医療や介護の現場で行われることが多く、医師や介護士といった専門職の知識が優先されがちであるが、本人が語る物語を検討することも重要であると考えられる。

キーワード：物語、物語倫理、物語的転回、原則主義

John D. Arras, 'Nice Story, But So What? *Narrative and Justification in Ethics*', in Hilde Lindemann Nelson ed., *Stories and Their Limits: Narrative Approaches to Bioethics* (London: Routledge, 1997), 65–88.

物語的転回

従来の英語圏の倫理学研究においては、抽象的な原則が中心的位置を占めていたが、近年それに代わって物語が注目を集め始めている。というのも、さまざまに異なる私たちにとって、あらゆる人に当てはまる原則を追求することは、価値観の押し付けになりうるからだ。医療倫理学においても、普遍的に当てはまる原則(功利原理や医療倫理の四原則など)を重視する原則主義(principlism)から、個別的な物語を重視する物語倫理(narrative ethics)へと関心が移り、物語的転回(narrative turn)を迎えている。

物語倫理とは、原則主義が切り離そうとしてきた生き立ちや社会的背景、人間関係といった

個別の物語に、むしろ一定の役割を与えようとする立場である。著者によれば、物語倫理は、①物語が倫理原則を補完するというもの、②物語が倫理の基盤であるというもの、③物語が倫理を代替するものであるというものの三つに分けられる。

原則を補完する物語

①の立場は、真の倫理には原則だけでなく物語も必要であると主張する。

リタ・シャロンは、倫理原則をよりよく適用するために、個別の物語に意識的になることが重要だと指摘する。例えば、カルテから見出せない患者の真の苦悩を把握したり、隠れた倫理的問題に気づいたりするためには、その患者や

家族などの物語に注目しなければならない。抽象的な原則を個別の事例に適切に適用するためには、具体的な物語に基づいていなければならないのである。

また、そもそも倫理原則それ自体も、物語なしには成立しない。ジョン・ロールズは、物語に対する判断と、抽象的な倫理原則とのあいだで両者をすり合わせていくことが重要だと主張する（反照的均衡）。原則は、それ自体で成立するのではなく、物語や事例との協働によってはじめて成立するのである。

さらに、倫理的問題はいつも「誰か」にとっての問題であるのだから、そのような「誰か」を理解するために物語が必要である。バーナード・ウィリアムズは、従来の倫理が「誰か」についてあまり論じていなかったことを指摘したが、そのような「誰か」を具体的に浮かび上がらせる物語は、原則に基づく倫理にとって、欠かせないものである。

以上のように、この立場は、原則主義に取って代わるものではなく、あくまで原則を補完するために物語が必要だと主張するものである。

倫理の基盤としての物語

②の立場は、倫理の根拠は物語にあると主張する。

彼らによれば、従来倫理の根拠とされてきた理性や合理性さえも、文化や伝統といった物語によって形作られている。つまり、倫理の根拠を突き詰めていけば、結局は物語に行き着くというのがこの立場の主張である。倫理を基礎付けるこのような物語は「基盤的物語 (foundational stories)」と呼ばれ、具体例としては聖書やヒポクラテスの誓いなどが挙げられる。この立場では、行為は抽象的な原則によってではなく、特定の共同体における文化や伝統によって正当化される。例えば、ある医師が自殺ほう助を拒否する場合、その行為はヒポクラテスの誓いに基

づく医師の伝統的役割によって正当化されるのである。この立場によれば、倫理の根拠はこうした個別的で具体的な物語なのである。

著者は、この立場が原則主義と比べて実践的な倫理的指針を与えやすいという美点があると評価しつつも、いくつかの問題点があることを指摘する。まず、この倫理は、私たちとは異なる他者を排除することになりうる。なぜなら、物語は、しばしば他者との対比によって、私たち自身を定義するからだ。そのうえで、この倫理は、私たちの物語と、他の物語による対立を解決しにくい。というのも、それらは本質的に共通の基盤を持ちえないし、普遍的な基準に訴えることもできないからである。

この立場は、倫理の個別的な側面を重視するがゆえに、普遍的な意見の一致を放棄することになるかもしれない。アラスデア・マッキンタイアは、より包括的な物語へと移行することで、物語の力を維持したまま、以上の問題を解決できると主張するが、古い物語に根拠を持つ私たちが、どうして新たな物語を受け入れるべきなのかといった疑問が残るだろう。

ポストモダンの倫理

③の立場は、物語を、倫理の基盤ではなくその代替物だと考える。

彼らは、善悪や正しさといった倫理的な概念を放棄し、ただ物語の重要性を強調する。例えばリチャード・ローティは、根本的な問題に対しては、倫理的な評価や正当化は無意味であり、むしろ新しい物語によって新たな見方を与え続けることが重要であると論じている。つまり、なんらかの結論によって終止符を打つのではなく、物語や会話を続けることで、倫理の空間を開いておくべきなのだ。アーサー・フランクも、物語の内容や形式ではなく、物語を語ることそれ自体を重要視する。彼によると、私たちは、自らの物語を語り、自らを振り返ることで、よく

生きることができるのだから、誰もが自身の物語を語るべきではない。また、語られた物語は、無意味はありえない。たとえ脚色され歪められた物語でさえ、そのような物語を持ちたかったという願いを意味しているのである。以上のように、この立場は、善悪や正しさを追い求めることをやめ、物語を語ることそのものが重要だと主張する。

しかし著者は、この立場は倫理的問題の解決を放棄してしまうのではないかと指摘する。あらゆる物語が重要であるなら、明らかに非倫理的な内容を含む物語に対して、倫理的な判断を下すことができなくなってしまう。また、個別の物語を重視しすぎるあまり、社会や制度といった、「大きな物語」における問題を見落とすことにもなりかねない。

この立場は、正しさを押し付けがちな倫理から、私たちそれぞれの物語を解放しようとする。

しかし同時に、倫理が果たすべき重要な役割も手放すことにもなってしまいうだろう。

結論とコメント

最終的に著者は、物語は原則に取って代わるものではなく、それを補完するものであるという①の立場を支持したうえで、物語が倫理において不可欠な役割を担っていることを強調する。

本プロジェクトで扱う高齢者の意思決定においても、医師や介護士の専門的な知識や、カルテおよび統計的なデータだけでなく、本人やその家族が語る物語にも注目することが不可欠だろう。そのためには、いかにして物語に基づいた倫理ができるのか、またいかにしてそのような能力を育てることができるのかといった、詳細な検討が必要だと考えられる。

黒田雄誠
京都大学文学部・学部学生

SMBC京大スタジオ「誰もが生・死後の尊厳を保つための持続可能な身じまい・意思決定とその支援」プロジェクト（幸せな身じまい方PJ）ではさまざまな領域の意思決定を対象として文献調査を進めています。詳細は[プロジェクトのウェブサイト](#)と[調査報告アーカイブ](#)をご覧ください。
ご意見・ご感想はinfo@ethics.bun.kyoto-u.ac.jpまでお願いいたします。